

第3章

コロナ禍の学生生活全般の満足・不満足による回答傾向の違い

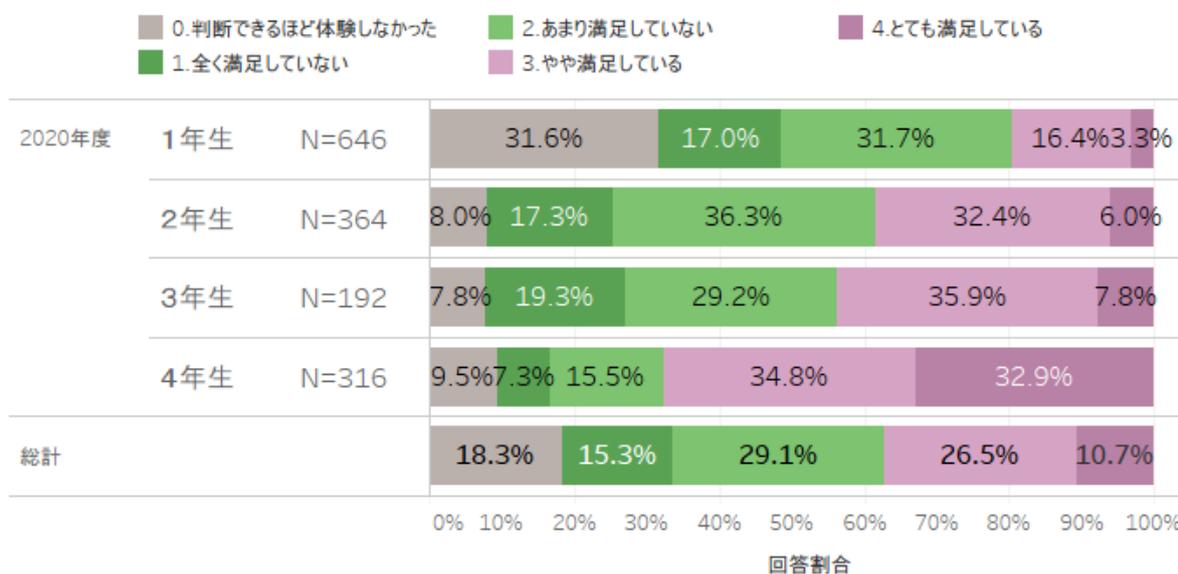
本章の概要

コロナ禍の2020年度においても学生生活全般について満足したと回答する学生が一定数見られたことを踏まえて、本章においては学生生活全般の満足度への回答を用いて回答者をグルーピングし、グループ別の回答傾向の違いを検討した。検討の結果、コロナ禍の学生生活に満足した学生は、授業の受講時間以外で主体的に学んだり、課外活動を意欲的に行ったりしていたことがわかった。また、事務室等の学生サポートを受けられたと感じる割合や受けたサポートに対する満足度も高い傾向にあった。このように満足を得られた要因としては、コロナ禍による制限がかかる中でも、大学のリソースも活用しながら、授業の受講以外に何らかの主体的な活動を行っていたことであると考えられた。

1. 分析の目的

第2章で見たように、コロナ禍の2020年度は学生生活に対する満足度が非常に低下した年度であった。しかし、図3-1-1に見るように、Q03-10.「学生生活全般」においては、1年生では20%弱、4年生では65%程度、全体では37.2%が「3.やや満足している」または「4.とても満足している」と回答している。コロナ禍の大学教育に対する不満は多くのニュースなどで取り上げられているが、満足した学生に関するものはあまり見当たらない。本章では、この学生生活全般の項目の回答をもとに満足した学生と、そうではない学生の回答傾向の違いについて検討することを目的とする。

図 3-1-1 Q03-10.「学生生活全般」に対する満足度回答分布



2. 分析の方法

本章では、Q03-10.「学生生活全般」に対する回答によって学生をグループに分け、グループ別に他の質問項目への回答傾向の違いを検討する。グループ分けは3つであり、「0.判断できるほど体験しなかった」と回答した「全般0」グループ、「1.全く満足していない」または「2.あまり満足していない」と回答した不満足寄りの「全般1・2」グループ、「3.やや満足している」または「4.とても満足している」と回答した満足寄りの「全般3・4」グループである。

方法としては、項目ごとにグループを要因とする分散分析（Welchの方法による）を行った結果が5%水準で有意であった場合は多重比較（Games-Howell）を行った。なお、回答の選択肢として「0.判断できるほど体験しなかった」や「0.経験しなかった」という回答値が0となるものがあるが、本章の分析においては平均値の計算から除外している。本章においては、学生が経験したと感じたかどうかを検討したいため、選択肢に「0」が含まれる質問についてはその割合も加味して複合的に検討した。

3-1.1年間の学び方

本節では、Q1で訊ねている1年間の学び方について、満足度のグループによる回答傾向の違いについて検討する。

図3-3-1 学び方に関する項目のグループ別の回答分布

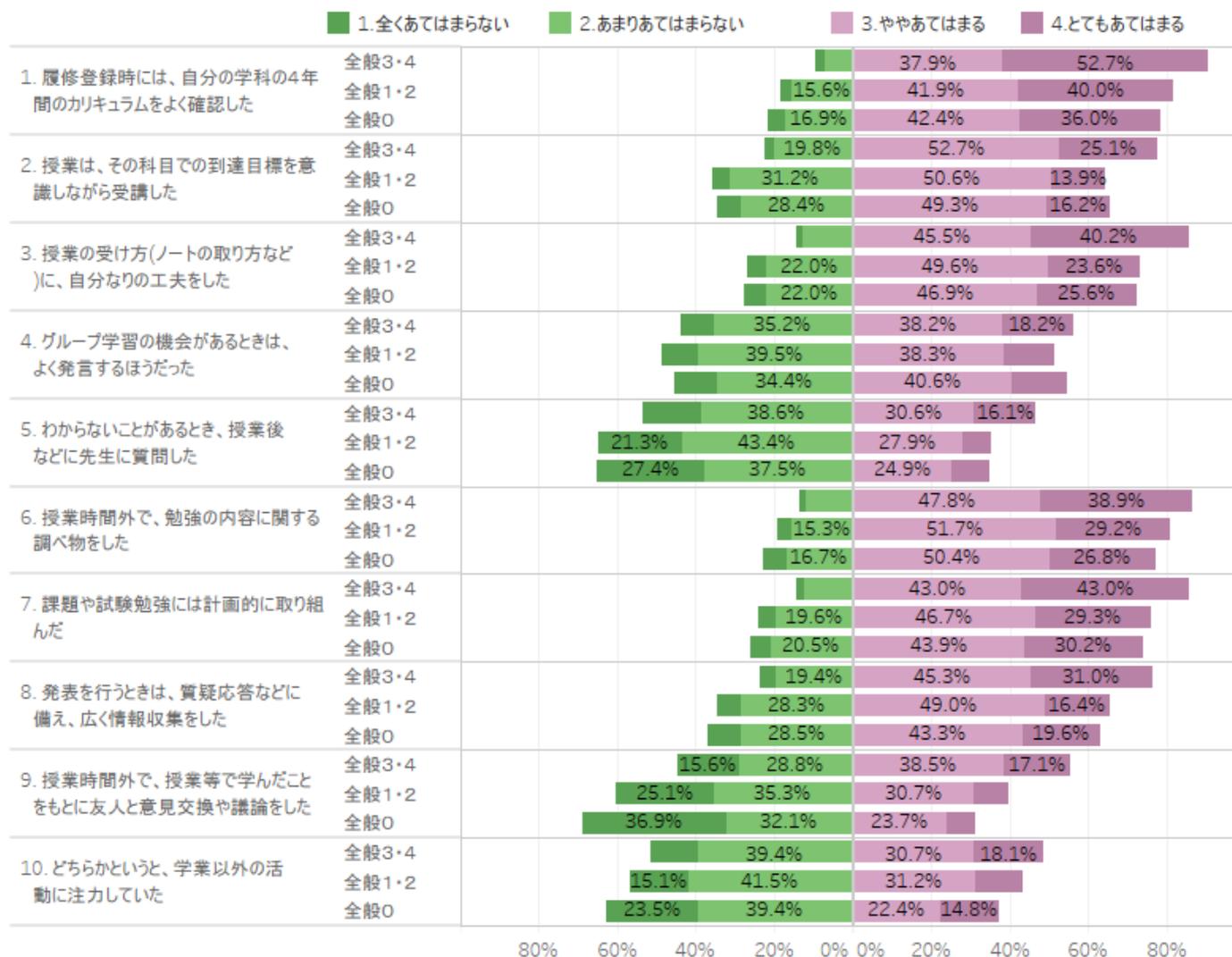


図3-3-1では、満足度のグループ別に回答の分布を示している。また、次頁表3-3-1では、回答の平均値を比較した結果をまとめた。これらを見ると、まず、9.「授業時間外で、授業等で学んだことをもとに友人と意見交換や議論をした」では、「全般0 < 全般1・2 < 全般3・4」となっており、学生生活全般を経験できなかったと感じる学生が最もできなかったと感じる内容であることがわかる。また、4.「グループ学習の機会があるときは、よく発言するほうだった」と10.「どちらかという、学業以外の活動に注力していた」ではグループによる違いが見られなかった。グループ学習における発言についてはどのグループも60%弱の学生は比較的積極的に行っており、学業以外の活動については60%程度が注力できていなかったとの回答である。その他の7つの項目では、全般0と全般1・2のグループ

の間に違いは見られなかったが、これらのグループに比べて全般3・4グループの平均値が高い結果であった。

ほとんどが遠隔授業になったことによるモチベーションへの影響は考慮すべき点ではあるが、上記の結果からは、コロナ禍の学生生活に対して満足感が得られていた学生は、そうではない学生と比べて、様々な学び方を意識的に行う傾向があったと言える。ただし、グループ学習での発言の積極性や、学業以外の活動への注力にはグループによる違いは見られず、グループによらず積極的に発言する学生が比較的多く、学業以外の活動に注力できた学生は少なかった。満足感に関わらず、グループ学習というコミュニケーションの機会を活用する姿勢が確認でき、また、学業以外の活動が比較的できていなかったことが改めて確認できた。

表 3-3-1 学び方に関する項目のグループ比較の結果

1. 履修登録時には、自分の学科の4年間のカリキュラムをよく確認した	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
2. 授業は、その科目での到達目標を意識しながら受講した	
3. 授業の受け方(ノートの取り方など)に、自分なりの工夫をした	
4. グループ学習の機会があるときは、よく発言するほうだった	グループによる違いなし
5. わからないことがあるとき、授業後などに先生に質問した	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
6. 授業時間外で、勉強の内容に関する調べ物をした	
7. 課題や試験勉強には計画的に取り組んだ	
8. 発表を行うときは、質疑応答などに備え、広く情報収集をした	
9. 授業時間外で、授業等で学んだことをもとに友人と意見交換や議論をした	全般0 < 全般1・2 < 全般3・4
10. どちらかという、学業以外の活動に注力していた	グループによる違いなし

3-2. 知識・能力の身についた実感

本節では、Q2で訊ねている知識・能力の身についた実感について、満足度のグループによる違いについて検討する。

図 3-3-2 知識・能力の身についた実感に関する項目のグループ別の回答分布

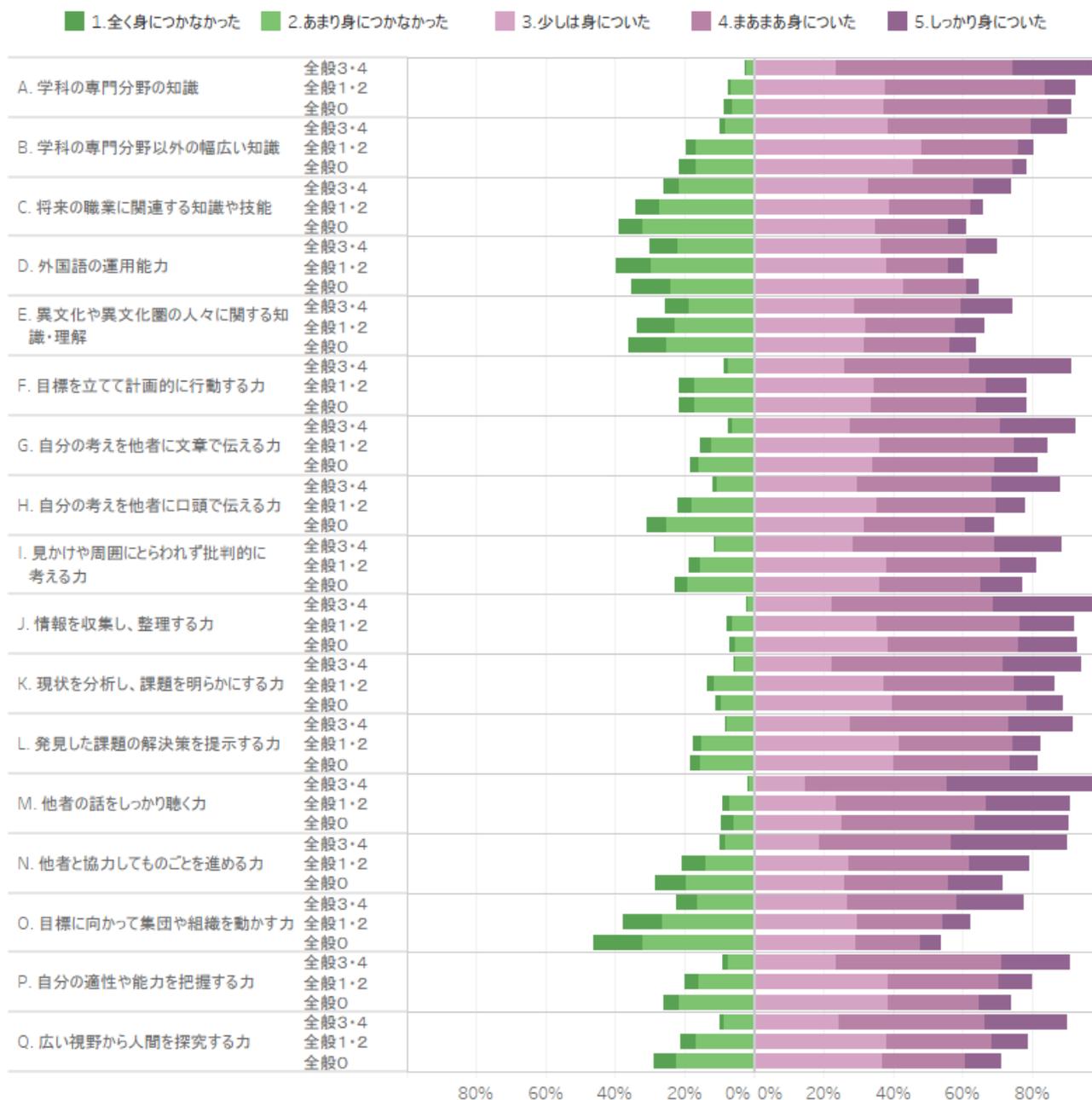


図 3-3-2 では、満足度のグループ別に回答の分布を示している。また、次頁表 3-3-2 では、回答の平均値を比較した結果をまとめた。これらを見ると、全ての項目で全般0と全般1・2のグループ間には違いが見られなかったが、これらのグループに比べて全般3・4グループの平均値が高い結果であった。

表 3-3-2 知識・能力の身についた実感に関する項目のグループ比較の結果

A. 学科の専門分野の知識	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
B. 学科の専門分野以外の幅広い知識	
C. 将来の職業に関連する知識や技能	
D. 外国語の運用能力	
E. 異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解	
F. 目標を立てて計画的に行動する力	
G. 自分の考えを他者に文章で伝える力	
H. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	
I. 見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力	
J. 情報を収集し、整理する力	
K. 現状を分析し、課題を明らかにする力	
L. 発見した課題の解決策を提示する力	
M. 他者の話をしっかり聴く力	
N. 他者と協力してものごとを進める力	
O. 目標に向かって集団や組織を動かす力	
P. 自分の適性や能力を把握する力	
Q. 広い視野から人間を探究する力	

このように、全般3・4の学生生活全般に満足していた学生は、その他の学生より学修実感を高く感じている傾向があるが、不満足寄りの回答をした全般1・2の学生と学生生活を体験できなかったと感じた全般0の学生の間には学修実感の違いは見られなかった。また、例えばA.「学科の専門分野の知識」は、どのグループも「3.少しは身についた」以上に回答する学生の割合が90%を超えている。この点から、学生生活に満足できた学生、満足できなかった学生、学生生活を体験できなかった学生のいずれも、学科の専門分野の知識は多少なりとも身についたと感じていることがうかがえる。したがって、学生生活を判断できるほど体験しなかったと答えた学生であっても、授業を受けて知識は身についた実感を得られていると考えられる。

3-3. 大学生生活への満足度(学生生活全般以外への回答傾向)

本節では、Q3で訊ねている1年間の大学生生活への満足度に関して、グループ分けに使用している10.「学生生活全般」以外の項目について、グループによる違いについて検討する。

図3-3-3 大学生生活への満足度に関する項目のグループ別の回答分布

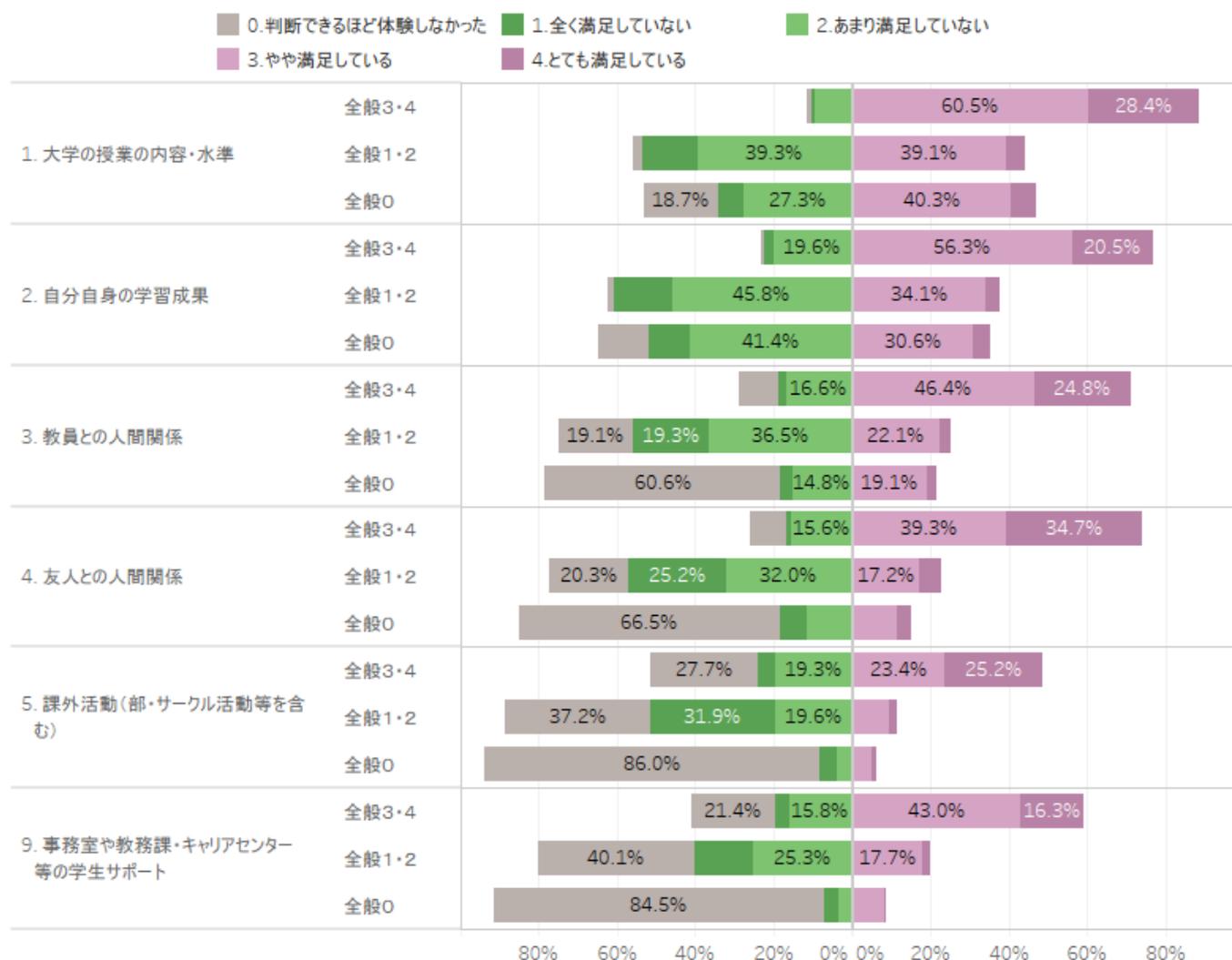


図3-3-3では、学生生活全般の満足度のグループ別に回答の分布を示している。これを見ると、1.「大学の授業の内容・水準」や2.「自分自身の学習成果」においては、「0.判断できるほど体験しなかった」と回答した全般0グループの回答割合は20%未満だが、3.「教員との人間関係」～9.「事務室や教務課・キャリアセンター等の学生サポート」については60%以上が0「判断できるほど体験しなかった」と回答し、教員・友人との人間関係の構築や、課外活動、事務室等の学生サポートも体験できなかつたと感じていた。授業や学習成果に比べて人間関係に関する項目では0の回答割合がどのグループでも高まり、さらに課外活動や事務室などの学生サポートになると0の回答割合はさらに高まる傾向がうかがえた。全般0グループについて言えば、授業や学習成果については体験できなかつた割合は20%で

あり、人間関係関連の項目については 60%以上となり、課外活動と事務室の学生サポートについては 80%以上が体験できなかったと回答している。

表 3-3-3 満足度に関する項目のグループ比較の結果

1. 大学の授業の内容・水準	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
2. 自分自身の学習成果	
3. 教員との人間関係	全般1・2 < 全般3・4 全般0の学生が、体験しなかったと回答した割合が特に高い
4. 友人との人間関係	
5. 課外活動（部・サークル活動等を含む）	
9. 事務室や教務課・キャリアセンター等の学生サポート	

表 3-3-3 では、それぞれのグループの回答の平均値を比較した結果を示している。項目 3～9 については、全般 0 グループの 0 の回答割合が特に高かったため、比較から除外している。結果を見ると、大学の授業の内容・水準や、自分自身の学習成果については、全般 3・4 が他 2 グループよりも高く、全般 0 と全般 1・2 グループの間には違いが見られなかった。項目 3～9 では、全般 1・2 よりも全般 3・4 グループの平均値が高くなっていた。

このように、学生生活全般に満足していた学生は、授業の質や自身の学習成果、教員や友人との人間関係にも満足しており、学生生活全般に不満足寄りの回答をしていた学生は、反対にそれらの内容にも不満足傾向にあることがうかがえた。また、学生生活全般を体験できなかった学生は、教員や他の学生との人間関係が構築できておらず、課外活動や事務室等のサポートも受けられていないことがわかった。授業や学習成果については体験できていたと感じていても、遠隔が主の授業を受けただけでは、教員や他の学生との人間関係構築につながってはいないことがうかがえる。さらに課外活動や事務サポートも体験できておらず、これらを複合して学生生活全般を体験できなかったと回答したと思われる。

3-4. 各種活動への取り組み意欲

本調査の Q4 で訊ねている各種活動への取り組み意欲について、満足度のグループによる違いについて検討する。

この質問の各項目へは、「0.経験しなかった」を含む選択肢から回答を選択する方式である。各項目の経験は履修状況等によるものであり、課外活動については本人の希望によるものであることから、単純に0の回答の割合の多寡によってコロナ禍の影響と捉えることはできない。本節ではまず、3つのグループ別の経験率を算出し、全体の回答傾向に比べて各グループの経験率が多いか少ないかを検討した。表3-3-4はグループ別の経験率(上段)と、その経験率が全体の回答傾向と比較して多いか少ないかを示したものである。

これを見ると、全般0グループは、5.「情報(情報処理)科目」の経験率が高い以外は、2.「自学科の専門科目(演習・実験・実習)」、3.「他学科の専門科目」、8.「資格課程(教職・学芸員)の科目」、9.「その他の資格や検定のための学習」、10.「上記以外の学習や読書」、11.「キャリアに関する活動(就職活動を含む)」といった科目や学習活動の経験率は低い傾向にあった。また課外活動関連の、12.「部活動」、13.「サークル活動」、14.「ボランティア活動」、15.「アルバイト」においても経験率が低く、全体に比べて経験していなかった。情報科目が多く、自学科の演習やキャリアに関する活動などが少ない要因としては、全般0グループは比較的1年生が多い(図3-1-1)ため、履修しているカリキュラムとの関連性が考えられる。

一方で、課外活動等の経験率が低いことに関して、例年の在学生調査では部活動やサークル活動の経験率が50%程度であることを考慮すると、全体的に低く、コロナ禍で課外活動が制限された影響がうかがえる。全般0グループの経験率がさらに低いことについては、全般0グループに多い1年生がコロナ禍で、部やサークルに加入しにくくなっていたことが考えられる。このように活動が制限されていたことに加えて、新入生の参加にも影響を与えていたことが調査結果からも読み取れる。また、アルバイトの経験率も比較的低いことから、全般0グループの学生は、家の外で活動することが他の学生に比べて少なかったことがうかがえる。

全般0グループとは反対に、全般3・4グループは、演習などを経験した割合が高く、資格課程やその他の検定のための学習に取り組めており、部活動も2020年度の回答者でいうと比較的経験できていた。コロナ禍において全員が制限を受ける中、全般3・4グループは比較的課外活動ができていたことがうかがえる。

表 3-3-4 取り組み意欲の各項目平均値

項目	全般0	全般1・2	全般3・4
1. 自学科の専門科目（講義）	94.2% （－）	96.4% （－）	95.4% （－）
2. 自学科の専門科目（演習・実験・実習）	81.5% （少）	85.2% （－）	90.6% （多）
3. 他学科の専門科目	62.1% （少）	69.8% （－）	72.6% （－）
4. 外国語科目	83.3% （－）	78.8% （－）	76.1% （－）
5. 情報（情報処理）科目	77.7% （多）	61.5% （－）	60.6% （－）
6. 基礎教養科目	77.7% （－）	78.3% （－）	76.6% （－）
7. スポーツ・健康科学科目	40.6% （－）	39.0% （－）	43.1% （－）
8. 資格課程（教職・学芸員）の科目	18.1% （少）	26.2% （－）	32.0% （多）
9. その他の資格や検定のための学習	52.2% （少）	57.3% （－）	66.1% （多）
10. 上記以外の学習や読書	78.1% （少）	85.6% （－）	88.1% （－）
11. キャリアに関する活動（就職活動を含む）	35.9% （少）	59.2% （－）	73.6% （多）
12. 部活動	13.4% （少）	29.6% （－）	33.9% （多）
13. サークル活動	15.5% （少）	32.6% （－）	39.3% （多）
14. ボランティア活動	9.7% （少）	14.8% （－）	20.2% （多）
15. アルバイト	74.8% （少）	83.6% （－）	81.5% （－）

このように、満足度のグループによって経験率に違いがあることを踏まえながら、経験したとじている学生の意欲についても検討する。図 3-3-4 は、「0.経験しなかった」を除いた回答分布を示したものである。これを見ることによって、各種活動に取り組んだ学生の意欲について、3つのグループ別の違いを検討することができる。表 3-3-5 では、グループ間で回答の平均値（計算に 0 は含まない）を比較した結果を示している。これを見ると、8.「資格課程（教職・学芸員）の科目」以外の項目で、全般 3・4 グループの方が全般 1・2 グループよりも高い意欲をもっていたことがわかる。また、全般 0 グループは学科の専門科目や

図 3-3-4 各種活動への取り組み意欲に関する項目のグループ別の回答分布



外国語科目においては全般1・2グループと同程度であり、全般3・4より低い結果であった。情報科目や基礎教養科目、ボランティアやアルバイトにおいては、他の2グループとの差は見られておらず、その平均値は全般1・2と全般3・4グループの中間程度であった。

以上のことから、学生生活に満足していた学生は、そうではなかった学生、あるいは体験できなかったと感じていた学生に比較して、意欲をもって各種の活動に臨んでいた傾向が確認された。また、学生生活に満足していなかった学生は、授業やその他の課外活動等について、経験はしていてもその意欲は高くない傾向となっていた。そして、学生生活を体験できなかったと感じていた学生は演習系の科目や課外活動等を経験できていなかった学生が多く、経験できていたとしても意欲的には取り組めていなかった。

表 3-3-5 知識・能力の身についた実感に関する項目のグループ比較の結果

項目	意欲の違い
1. 自学科の専門科目（講義）	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
2. 自学科の専門科目（演習・実験・実習）	
3. 他学科の専門科目	
4. 外国語科目	
5. 情報（情報処理）科目	全般1・2 < 全般3・4 (全般0は他グループと差がない)
6. 基礎教養科目	
7. スポーツ・健康科学科目	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
8. 資格課程（教職・学芸員）の科目	—
9. その他の資格や検定のための学習	全般0 ≒ 全般1・2 < 全般3・4
10. 上記以外の学習や読書	
11. キャリアに関する活動（就職活動を含む）	
12. 部活動	
13. サークル活動	全般1・2 < 全般3・4 (全般0は他グループと差がない)
14. ボランティア活動	
15. アルバイト	

3-5.まとめ

以上、各質問の満足度について、グループ別の回答傾向の違いについて検討してきた。コロナ禍での学生生活について満足していた学生は、学び方で様々な工夫をし、授業や、課外活動等についても経験したものに対して意欲的に取り組んでいた。また、知識や能力の学修実感も高く感じており、授業内容や学習成果、教員や友人との人間関係についても満足している傾向にあった。一方で、学生生活に満足していなかった学生や学生生活そのものを体験できなかったと感じていた学生は、満足していた学生に比べて学び方・学修実感・満足度・意欲の多くの点で自己評価が低かった。ただし、グループ学習時の発言の積極性や学業以外への活動への注力については、学生生活の満足度による違いは見られなかった。

コロナ禍の学生生活における社会的制限として、大学に来られなかったことがまず挙げられるだろう。学生生活全般を体験できなかったと回答した学生は、授業が遠隔で行われたこともあり、授業は受けたがその他の活動が制限され、教員や友人との人間関係が構築できなかったと感じていた。このような環境においても満足を得ていた学生は、学び方の工夫を積極的に行い、意欲をもって授業や活動に取り組んでいた。課外活動の全体的な経験率が前年に比較して約 20%低下しており、学生生活を体験できなかったと感じた学生においてはさらに低く、加えて事務室等の学生サポートについても受けられていなかったことが確認できた。

このように、コロナ禍の学生生活に満足を得られた学生は、授業を受ける以外の時間で主体的に学んだり、課外活動を行ったりしていた。また、このような学生が事務室等の学生サポートを受けていた割合や満足度も高い傾向にある。学生生活に満足を得られた要因として、授業以外に何らかの活動を行っていたこと、とまとめられる。2020 年度第 1 学期のように全面的に遠隔授業となった場合、対面授業で教室に学生が集まる状況と異なり、Zoom 等で授業に出席していても、学生同士が自然発生的にコミュニケーションをとる機会とはならない。キャンパスに学生が集まることによって発生するようなコミュニケーションの機会すら、コロナ禍においては、オンライン上で主体的に動かなければ得られなかった。そのような動き方ができた学生が満足感を得られた、ということの本調査の結果は示している。

在学生調査は任意回答であり、例年 GPA の高い学生のほうが回答率は高い傾向がある。こういったことから、回答した学生は、回答しなかった学生に比べて、大学の取り組みに対して積極的な学生であると言える。回答しなかった学生の状況としては、本章の分析でいう全般 0 グループのような、学生生活そのものを体験できなかったと感じたり、事務室等のサポートも受けられていなかったと感じたりする学生は多いことが考えられ、学生全体のことを考えると事態はより深刻であることが想定される。

近年では、オンライン会議ツールの他にもバーチャルスペースの中で会話ができるサービスもあり、学生同士の交流のために授業とは別に利用する、という方法も検討に値するようと思われる。しかし、学生生活を体験できなかったと感じていた学生は、同時に事務室な

どの学生サポートも体験できなかつたと感じていたことを踏まえると、教務課・キャリアセンターのほかに、学生相談室やラーニングサポートセンターの利用方法の周知がまず重要になると思われる。このことによって、学生が主体的に動くきっかけを増やし、その中で主体的に動くことそのものの学びを深めていける可能性があると思われる。

本調査では、引き続き回答率改善の努力をしながら、大学や社会の変化とともに学生にどのような変化がみられるかを経時的に捉え、本学の内部質保証サイクルを支援できるような活動を継続していきたい。